

ドイツ法の周辺で—再統一をめぐる人々のこと— (続)

前号掲載分で予告した「ベルリンの壁を崩壊させた三人の男達」に関する新資料を読みながら、このテーマを取り上げるならばその数か月前のハンガリーをめぐる出来事に触れないわけにはいかないことに思い至った。そうすることで、1989年秋のドイツの事件が地理的にも時間的にも格段に拡がりを見せる。奇しくも今年には第一次世界大戦開戦100周年であり、すでにマスコミでは多くの特集が組まれている。これが一段落すれば、11月9日にベルリンの壁崩壊25周年を迎える。

壁崩壊に関与した最も有名な人物は、ギュンター・シャボウスキであろう。彼は東ドイツの独裁政党ドイツ社会主義統一党の最高幹部(政治局員)であり、同時に政府スポークスマンの地位にあった。1989年11月9日午後6時正に彼の記者会見が始まった。党中央委員会総会、新選挙法等に関して淡々と報告が行われ、終了予定の午後7時が近づいていた。その時ひとりのイタリア人記者が、下手なドイツ語で、会見場の停滞した空気を一変させる質問を発する。—「先日公表された新旅行法案は大きな間違いだったのでありませんか。」

自由を求める多くの市民がすでにハンガリー経由で西へ逃れ、この時期ブラハのドイツ連邦共和国(西ドイツ)大使館の敷地内には西ドイツへの出国を要求する東ドイツ市民数千人が塀を乗り越えてなだれ込んでおり、西ドイツ、チェコスロバキアを巻き込む深刻な国際問題となっていたから、旅行法の大幅な緩和は必至の情勢にあった。しかし、ベルリンの壁によって国民を西側から隔離することは、東ドイツ存続の条件、いわば国是であり、相反するこの二つの要請の間で解決を見出せるか、イタリア人記者は旅行法案のあり方を批判することで、この大問題に切り込んでいく。

シャボウスキは「いいえ、間違いだったとは思いません」と回答を始め、まず政府公式見解の一般論を述べた後、「本日ひとつの決定がなされました」と数時間前に中央委員会で採択されたばかりの旅行法改正について触れる。後日「シャボウスキのメモ」と呼ばれることとなる改正概要のメモを、記者会見の直前に党中央委員会総書記エゴン・クレンツから直接手渡されていたのである。

「本日の決定は、すべての国民が国境検問所から出国することを可能にするものです。」

「いつから効力を発するのですか。」「すぐに?」この質問に答えず、シャボウスキはメモを頼りに概要を説明し上げる。再び「いつから効力を発するのですか」と声上がる。

「私の知る限り、すぐに、遅滞なく、ということです。」

「ベルリンの壁を通過できるということですか。」「ええ、再入国を放棄して出国する者は、西ベルリンを含めた両ドイツ間の国境検問所を通過することができると記されています。」

終了を待たず会見場は混乱に陥り、記者たちが会場を走り出る。このとき、予定どおり午後7時。その日のうちにベルリンの壁は崩壊し、世界の政治地図が書き換えられることとなる。会見における彼の発言には、二つの決定的なミスがあった。第一に、改正概要では旅行や出国の要件が格段に緩和されているとはいえ事前許可手続が不要になったわけではないにもかかわらず、西側への旅行・出国が事実上自由になったという印象を与えたことである。第二に、改正概要の公表時期が翌日の10日であると明記されている点を見落とし、「すぐに、遅滞なく」効力を発すると述べた。

東ドイツ国営テレビは記者会見を実況放送しており、さらに、東ドイツ市民が日常的に見ている西ドイツ第一テレビ(ARD)の定時ニュースでは会見終了一時間後に「東ドイツが国境を開放」と報じられた。多くの市民が、パスポートを持って検問所へ行けばすぐに西へ出国できるのではないかと認識し、動き出す。他方、会見後シャボウスキは帰宅し、歴史を動かしたことをその日のうちに知ることはない。

眠りについた男から運命のボタンを受け取ったのは国家保安省の将校ハラルト・イエーガーである。彼は東西ベルリン間の最も重要な検問所の一つポルンホルマー通り検問所の担当責任者として、その日、11月9日に任務に就いていた。イエーガーは夕食時に放映されていた記者会見に驚き、状況確認のために連絡を取った上官もシャボウスキ発言に困惑するだけだった(「まずは静観するんだ。集まってきた者たちはそのまま帰す。会見終了から約30分後のその時すでに、検問所前には20人ほどの市民が集まり「西に出られるのか?」と係官に尋ねている。さらに一時間が経過した午後8時30分には数百人に膨れ上がり、時とともに増え続ける。その声は、午後9時ごろにはもはや「出られるのか」という質問ではなく「出国させろ」「門を開けろ」という要求に変わる。ガス抜きのための対応策として午後9時30分前後、押し寄せた市民のうち「挑発的分子」だけを(再入国の権利なく)出国させる措置がとられた。これは上官の示唆によるものであったが、高まる圧力に対し何ら危機回避の効果をもたらさない。ベルリンの検問所で起こっている事実とその根拠について、東

ドイツ政府関係者は誰も正確な情報を得ていないのであるから、適切な指揮命令は望むべくもなかった。群衆の圧力によって検問所の鉄条網が破壊され、市民、警備兵の双方に生命の危険が迫るという危機に直面して、イエーガーは決断し、ボルンホルマー通り検問所の門を開放する。11時30分、多くの東西国境の中で最も早かった。市民は自由に西ベルリンへ入り、また自由に東へ戻った。

突如として数千人、数万人の群衆が集結したのであるから、警備側と市民側の間の力関係が逆転し、体制側が受けた脅威は想像を超えたものであったろう。それにもかかわらず（だからこそというべきか）、この夜、国境をめぐって一発の銃弾も発射されなかった。市民の要求に沿って、超法規的に検問が放棄された。平和な革命を実現させた原動力は何か。日付が10日に変わった直後に、現場を視察した国家保安省高官と内務省高官の間で交わされた「厳しい状況だな」「社会主義の敗北だよ、どこにも支持者がいないのだから」という会話がヒントになろう。二人が体制の中核に身を置く人物であることを考えれば、イエーガーの決断と同じく、この会話も冷静で理性的である。

半日ほど時計を戻せば、内務省出入国管理部長ゲアハルト・ラウターが9日午前中に庁舎内で国家保安省高官を含む3名の担当者と議論していた。彼らは、前述した意味におけるチェコ問題を解決するため新旅行規則案を作成するよう命令を受けていた。前述したように、西側への旅行の自由の問題は東ドイツの存立に係わる問題であり、国内的にも対外的にも緊張が極限に達していた。会合では、ラウターの主導により自由度を最大限に高めた規則案が策定され、党（政治局、中央委員会）と政府（大臣会議）に提出された。この旅行規則案が基本的にそのまま党の決定を経て、記者会見場へ向かうシャボウスキの手に渡り、数時間後には壁を崩壊させ、さらに翌年には一つの国を消滅させることになる。

ラウターらの提案の特質すべき点は、第一に、旅行の制限を可能な限り撤廃する進歩的なものであったこと、第二に、上層部からの命令が永久出国の規則案の作成を求めているのに対し、提案は外国旅行（帰国することを前提とした出国）を含めた包括的な内容であり、まさに東ドイツ国民の要求に対応していたことである。体制崩壊直後のある時期、新規則案の実質的策定者ラウターには革命の意図があったのではないかと、すなわち東ドイツ国家の転覆の意図があったのではないかといわれた。それほど大胆な内容であった。ドイツのマスコミは、言葉の真の意味で歴史を「書いた」男という称号をラウターに与えている。能力を評価されたのであろう、統一後ドイツ政府機関のポストのオファーを受けたが、職務上仮想敵としてきたドイツ連邦共和国政府職員となることの違和感から、これを辞退している。

インパクトの点でベルリンの壁の崩壊の影に隠れているが、その80日前に鉄のカーテンに最初の穴を開けたハンガリーの功績を否定する者はいない。チェコスロバキアと同様ハンガリーにも西への出国を望む多くの東ドイツ市民が滞在し、緊張が頂点に達していた1989年8月19日、ハンガリー、オーストリアの連携により東ドイツ市民数百人を西側へ脱出させることに成功した。ハンガリー国務大臣イムレ・ポシュガイ、オーストリアのヨーロッパ議会議員オットー・フォン・ハブスブルクが主催者となり、小都市ショブロン近郊の国境に面した草原への「汎ヨーロッパ・ピクニック」を開催して、出国を希望する東ドイツ市民に参加を呼び掛け、国境を開いたのである（ドイツ語のピラが配布された）。開放は3時間、約600人が出国した。多くはない。しかし、ハンガリー政府が事実上公認して鉄のカーテンを無力化したことの意味は、きわめて重い。

1848年フランクフルト国民議会から1871年ドイツ統一への展開の中で「ドイツ」から切り離されたオーストリア・ハンガリーが、二十世紀の負の歴史を背負って苦悩する東西ドイツに手を差し伸べたようにも思える。ハンガリー政府とともに、オーストリア側から「ピクニック」を支えた汎ヨーロッパ運動の創始者リヒャルト・クーデンホーフ＝カレルギー（1972年没）の母は、東京牛込の出で、オーストリア＝ハンガリー帝国の貴族に嫁いだクーデンホーフ＝カレルギー光子（青山みつ）である。

統一後のドイツは、たとえば2013年連邦議会選挙結果や2014年サッカーワールドカップドイツ代表チームの顔ぶれにも表れているように、文化的・社会的・政治的に多様で豊かになっている。東ドイツだけではなく、西ドイツも過去のものとなった。

（注）Hans-Hermann Hertle「Chronik des Mauerfalls - Die dramatischen Ereignisse um den 9.」およびDie Zeit、Süddeutsche Zeitung、Der Spiegel等の関連記事を主として参照した。

ポーランド連帯（Solidarność）、ブラハの春も重要であり、興味深い。

慶應義塾大学大学院法務研究科教授 江口公典